

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'91冬



|| 第153回大学共同セミナー ||

● 日本人は「豊かな社会」を作れるか

|| 第17回国際学生セミナー ||

● 地球時代の生き方を求めて — 開発と環境 —

● 新春随想 「場」としてのセミナー・ハウス

● 国際社会の歴史的変動とセミナー・ハウスの役割



Plain living and high thinking

No.121

「豊かな社会」の生き方

—あなたは「快人」か—

慶応義塾大学商学部教授 井原 哲夫

経済的条件と生き方は車の両輪

日本の社会はどれだけ「豊かな社会」と言えるのだろうか。経済的条件は、一人当りの国民所得や金融資産残高等々の数字が示すとおり、国際的には極めて高い。しかし、人々はこの経済的条件に見合った「豊かさ」を必ずしも実感できないでいる。一方で、「清く貧しく美しく」とか「ボロは着てても心は錦」という言葉があるように、人間の満足感生き方とも密接に関連している。このように考えると、経済的条件と人間の生き方は車の両輪であり、両者がうまくかみ合っていないと人間は満足を得るのである。

しかし個人のレベルを超えて、人間の集団である社会を考えると、車の両輪を支えている社会システムの働きも重要である。昭和三十年代半ばの日本は、池田内閣の所得倍増計画を受け入れた。人々は月給が倍になれば、満足も倍になると考えたのである。現在、日本人は経済的条件が高いにもかかわらず、豊かさを実感できないとしたら、人間の生き方か社会システムのどちらかに欠陥があるからである。

ところで人間が元来、目指してきた「豊かな社会」とは、一体、どのような社会なのだろうか。平均的な人間は、いつの時代でも、「楽をしたいと思いたい」と願ってきたのではないだろうか。私が描いた豊かな社会の一つのモデルは、「人間が心の赴くままに行動し、結果として満足し、他人に迷惑を

けない社会」である。

しかし現実の社会は、心の赴くままに行動すれば、会社を首になり、結果として満足できず、他人に迷惑をかけるというように、トリードオフの関係が成り立っている。人間はこの矛盾を緩和しようと努力し、制度やルールを作り出してきた。人殺しをしてはいけない、盗んではいけないというルールは、社会にとつての善であり、ルールに違反しなければ、「心の赴くままに行動し」、「結果として満足し」、「他人に迷惑をかけない」という三つの条件の矛盾は緩和されるが、「心の赴くままに」の制約はきつくなる。

市場システムと「しほり」

これらの条件を満たす体制として、市場システムが存在する。市場システムは近年、環境問題や資源問題を生み出しており、決して完全ではないが、企業はこの市場システムに主体として参加し、目的達成のために赴くままに行動し、結果として日本の経済は強大になった。

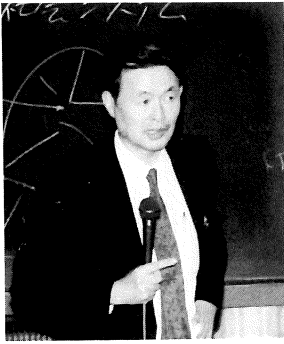
日本の市場システムにおける主体は企業であって個人ではなかった。そして企業の一構成員である個人に強い「しほり」がかかってくる。曰く「忙しい時にはすすんで残業をすべきである」、曰く「勝手に休暇をとってはならない」、曰く「会社の秩序は維持すべきである」等々。このような「しほり」は大企業制度の成熟化が進む戦後に発生してくる。企業内の人間は、かつての藩に仕える武士同

様、首になれば浪人である。一度流動化のない社会が出来上がると、そこには特有の「しほり」が生れ、ますます移動が困難となる。企業の盛衰と個人の幸せが一对一で対応する運命共同体が形成される。帰属企業がおかしくなれば再建のために協力する十分な動機をもつ。残業もすれば賃金カットも受け入れられる。

根性、バイタリティー、協調性が人材養成の要であり、「みんなで頑張ればなんとかなる」という「しほり」を甘んじて受け入れる。こうして個人のレベルの「豊かさ」は著しく阻害されるのである。移動性が欠如した社会においては長期間で辻つまを合わせる年功序列型賃金は有効である。取引形態をとつてみる方式が日本においては顕著に見られる。

一方、企業内ばかりでなく、我々の日常生活にも、お中元、お歳暮、年賀状など、多くの「しほり」が存在している。国際比較で見ると、日本人の一世帯当りの冠婚葬祭費や交際費は桁違いに高く、所得の伸び率より早いスピードで増加している。プライダグ産業は「皆さん、こうなさいませ」の殺し文句で、すべてが決まると言われるくらいに、日本人の人並み志向は強いのである。

また、日本人はどこに生活の力点を置きたいと考えているかと言えば、レジャーや余暇生活と回答している人の割合が、この十五年間で二倍以上へと増えている。しかし国際比較で見ると、その満足度は低いのである。期待水準が上昇したにもかかわらず、充足水準の方はあまり改善していないからギャップが開き、不満が顕在化するのである。レジャー



を楽しむには、お金だけでなく、時間、仲間、施設、能力、そして一種の価値観のようなものが必要となる。

日本人はお金、仲間には一応不自由しないが、時間はどうかであろうか。私は、時間には①物理的時間、②タイミングを持った時間、③柔軟性を持った時間の三つがあると考えている。物理的時間は人生八十年で七十万時間といった類の時間である。タイミングを持った時間とは、週休二日、年休が何日といった時間のことであり、柔軟性を持った時間とは、例えば、ふっと旅行に出たくなったときに、自由にとれる時間のことである。具体的には「自由にとれる有給休暇」がこれにあたる。しかし、しぼりがきつく、自由に休みをとるわけではないのである。

日本には、暮・正月、ゴールデンウィーク、お盆という三大移動期があり、この時期には公共施設が満杯になる。サービスは工業製品のように計画生産はできないし、在庫もきかない。施設に対する需要は偏在化し、休日のレジャーはどこでも大混雑をする一方、全体としての稼働率が低下し、結果的に高い料金を支払うことになるのである。もし、人々が「柔軟性を持った時間」を手に入れるならば、すいた時間をねらって余暇活動を行なうから、需要が平準化して稼働率が上昇し、料金の低下が期待できよう。

日本の社会では仕事と勉強が一番評価されることの例として、面白い話を紹介しておこう。有給休暇をとって物見遊山に出かけるのは後ろめたいが、「旅行」の前に魔法の二文字をつければ、会社が旅費を支給してくれる。

それは「研修」と「調査」である。言ってみれば、価値の高いものにかこつけて遊びに行くのが、研修旅行である。同様に修学旅行も、勉強の延長と考えられるから、教室内の服装がそのまま着用されるのではないだろうか。

「快人」の生き方が社会を変える

さて、近年の労働市場の流動化には目ざましいものがある。企業は必要な人材、即ち顕在化した能力を必要とときに求めようとす。これまでの企業は潜在能力を買って、大学の選別を行なってきたが、これからは大学の入試の難易度より教育内容が問われてくるだろう。また、OA機器の発達が仕事の内容や職場のあり方を一変させている。かつてはグループで行なっていた仕事も個人ベースで行なわれるようになった。グループ化から個別化への転換は、自宅、会社、サテライトオフィスなど、それぞれの場所で出来る仕事をこなしていくという仕事の仕方を可能にするばかりか、労働時間も工業化社会の生み出した九時五時労働はなじまなくなり、情報化や国際化が、仕事のあるときだけ働く、という方向に一層拍車をかけていくことだろう。

このように労働の流動化が進むと、問題となるのは評価の方法である。日本社会はこれまで、「あいつ頑張っているなあ」というインプット評価で成り立っていたが、課長の目の前で仕事をしないということになれば、アウトプット評価にならざるを得ない。

一方、企業内組織も分解している。企業活

動を行なう上で必要なサービスを自給しているのが「部」や「課」であるが、これらのサービスが次第に外注化でまかなわれるようになり、更には第三者の需要もとり込んで独立した企業を作るといった分社化も起こっている。今後は、大企業に就職したからといって、定年まで働いている確率は少なくなり、分社化した企業の店長や社長になったり、個人で独立するケースも見られるようになるだろう。

「いじめられたら、他所へ自由に移動できる」労働市場は、選択肢の幅が著しく拡大した社会である。このような社会では従来の掟にしばられた生き方とは違った、別の生き方が可能になるだろう。私は掟を守ることに喜びさえ感じる人間を仮に「善人」と呼び、掟に対してなんの意義も感じない人間を「快人」と呼ぶ。

両者の違いを明確にするために、次のように人間の欲求を三つに分類してみる。①五感欲求、②好奇心、③ほめられ欲求のうち、「善人」はほめられ欲求が極度に強い。これに対して「快人」は、五感を満たすものに極めて敏感で、好奇心も強いが、ほめられ欲求は弱い。「善」にこだわらない「快人」が掟を一つ一つ合理的にしていくことができるのである。

私は、「快人」こそが、「豊かな社会」の担い手になるだろうと、秘かに期待しているのである。
(文責・編集者)

▼全体講義

Ⅰ 「豊かさ」とは何か

東京大学先端科学技術研究センター教授

竹内 啓氏

Ⅱ 「豊かな社会」の生き方

—あなたは「快人」か—

慶応義塾大学商学部教授 井原哲夫氏

▼シンポジウムの発題

Ⅰ ライフスタイルは多様化するのか

お茶の水女子大学家政学部助教授

袖井孝子氏

「豊かな社会」に生まれ育った現代の若者に、このセミナーは果たしてどれだ

◇

早稲田(10)、中央(6)、一橋(5)、千葉・慶応義塾・津田塾(各4)、東京・明治・明治学院(各3)、東京理科・法政(各2)、お茶の水女子・電気通信・東北・九州・都留文科・青山学院・上智・聖心女子・東京経済・東京女子・日本女子・武蔵(各1)、その他(4)、以上23校

第153回
大学共同
セミナー

—主題—

日本人は
「豊かな社会」を作れるか期 日
'90.11.9~10Ⅱ データが語る日本の「豊かさ」
総務庁統計局統計情報課長

菅原眞理子氏

Ⅲ 資本主義は豊かさを保障するか

一橋大学経済学部教授

室田 武氏

▼運営委員

竹内 啓氏

室田 武氏

袖井孝子氏

▼参加者62名(内女子23名)

けアピールするであろうか。そもそも「豊かさ」を問題にすることは、貧しい時代に育った世代の発想ではないのか。このような疑問を抱きながら、2回に亘る企画会議を経て練り上げられた今回のセミナーであったが、幸いにも62名の参加者を得て、二日間に亘り、終始活発な討論が行なわれた。

◇

プログラムは、冒頭のセッションで行



シンポジウム——左から袖井、室田、菅原、竹内の諸氏

なわれた二つの全体講義を柱に、分科会をはさんだ前後2回のシンポジウム、そして最終セッションの総括討論で構成された。

豊かさの問題を論ずるのはむずかしい。価値観をどこまで含めるかによって、「貧しくても幸せ」式の幸福論に行きついてしまうからである(竹内氏)。このセミナーでは、現代社会のシステムと日本人の生き方を浮き彫りにすることによって、人が幸せであるための必要条件を考えることに、主眼が置かれた。

◇

日本は、所得(フロー)の面でも金融資産(ストック)の面でも、世界のトップに位置している。日本は確かに世界の大金持ちになった。しかし、このことは

日本が「富国富民」であることを必ずしも意味していない。日本国や会社という集団は豊かだが、個人はどうなのだろうか。

個人の生活において、日本人は貧しいのかといえば、衣・食・住のどれをとっても、国際比較では決して悪くはない。しかし、日本人は生活に「満足しているか」と問うならば、労働時間、通勤時間、の長さが、生活のゆとりとはほど遠いことを実感させている。同じ所得で家計の貯蓄率が高いことは、普段の生活を十分に楽しんでいるということだろう。また、社会公共資産の面でのストックの不足は明らかである。

それでは我々日本人は、「もっと豊かになろう」と考えてよいのだろうか。資源の有限性がそれを許さないし、地球環境も危ない。更には、「もっと豊かに」なるために、効率性を追求して無駄を省こうとすれば、肝心のゆとりを欠くことになりかねない。物事がある方向に一生懸命考えること自体が、ゆとりとは遠ざかってしまうということもあり得るからである。

以上は竹内氏の問題提起であった。どうやら大変厄介な問題に踏み込んでしまったというところで、竹内氏は、この問題にアプローチするには、ゆとりある生活を妨げている事柄を、一つ一つ具体的につぶしていく方法がよいのではないかとの手がかりを示され、講義を締めくくられた。

次に井原氏は、「豊かな社会」の生き方をめぐり、現代社会の労働慣行や労働意識にメスを入れながら、「快人」という一つのモデルを提示し、日本の社会に「快人」が多数占めるようになったとき、日本は「豊かな社会」に近づくのではないかとこの仮説を提示され、若い人々に期待をつなげられた（全体講義Ⅱの要旨は2、3頁参照）。

以上の二つの講義に続く後半のセッションでは、講師間のコメントを中心に議論が進められた。

はじめに袖井氏は、「豊かであること」を後ろめたく思うのは、もう時代遅れという気がしてきた、と口火を切り、次のように言われた。

ここ20数年における日本人の生活の急激な変化を考えると、国際比較でものを見るばかりでなく、時間軸も併せて考えていかねばならないだろう。情報化社会と言われる現代は、選択肢が増えているにもかかわらず、人々の行動をワンパターンにしてしまっている。若者向けの雑誌のほとんどが情報誌でありカタログ誌であることに見られるように、若者にブランド指向が強い。このように情報量の多いことがライフスタイルをかえって画一化させていることを考えると、本当に豊かになるためのキーワードは、「自己決定権」であり「個性」ではないのか。現代社会が労働市場の流動化により様々な揺さぶりを受けていることは井原

氏の指摘するところであるが、他面において、付加価値を売り込む生産者の論理に消費者は振り回され、生活者としての能力が問われてもいる。消費生活が目的化した社会では、どれだけ自由になる時間とお金（可処分時間と可処分所得）があるかが問題とされるが、これらを上手に消費する成熟社会の実現は、個人人の能力にかかっているものであり、教育はその意味で重要なファクターである。

政府関係の白書にも、「もはや生産者の時代ではない」「生活者の視点から」という謳い文句がさかんに使われるが、我々は「生活者の視点」という名目で、振り回されてはいないか。東京というライフスタイルの売り手市場は、地方分散の掛け声とは裏腹に、ますます東京への憧れをかりたてている。

菅原氏は、総務庁の統計が生産者サイドに偏り、生活者サイドのデータが十分に整理されていないと指摘した上で、様々なデータを①ハードの指標、②ストック面での豊かさ、③時間・文化・その他、④ソフトの指標に分類し、各々に分析を加え、統計の「読み方」を示された後、最後に、より恵まれない人に、自分のストックを使えるような大国の国民としての行動様式なり価値観が身につけて、はじめて心のゆとりが生まれるだろうと提起された。

室田氏は、「豊かな環境」を考える上での環境指標はまだ未整備である現状を指摘しつつ、日本の条件下で、「上

下水道」の普及率によって豊かさをはかることへの疑問を投げかけ、国土の60%以上が「森林」に包まれている日本の豊かさの背後に、木材輸入の依存度の高さと雑木林の減少（針葉樹林の増加）という「不健康さ」を見、更に安全性確保を名目に、核燃料生産の外部化が進行している「原子力発電」の問題や「炭酸ガス」による地球の温暖化について言及された。

「豊かな社会」のイメージは、なかなか明確に打ち出しにくい。人類史上、第二次大戦後のアメリカ、ヨーロッパ、そして日本の経験があるのみのだから。すべての人々にとって「豊かな社会」とは、かつて身分の低い人が行なっていた仕事を、みんなで引き受ける社会ではあるまいか（竹内氏）。

あるいはまた、多くの人々に「豊かな生活」をしてもらうために、自分の仕事の達成感を喜びとする人もますます必要となるだろう。生産労働は効率化によって減らせるが、自分を高めるための努力や、ハンディのある人を支えたり、人のいやがる仕事をするといった別の働き方はなくならないし、またなくしてはならないだろう（菅原氏）。

最終セッションは、前夜の分科会の議論を土台にして、学生中心の討論が展開したが、言うまでもなく一つの解答なり結論が与えられるものではない。時に堂々巡りとなる討論の中から、それぞれ

に手応えを感じとったことであろう。「セミナー参加後、大学の授業に出席して、余りにも大きなギャップがあったことに気づき、愕然とする思いでした。本当に問題意識を持っている人々が集まってくる大学共同セミナーこそ、本来の大学であり、とても重要な存在だと思いました」（千葉大学法経学部2年）という感想が、その辺の事情を伝えてくれている。

このセミナーにオブザーバーとして、参加していたメリー・ホワイト氏（ボストン大学準教授）は、若者文化の日米比較を行なっている研究者の立場から次のようにコメントされた。

アメリカの社会で大人になることの意味は、法的な生活の場で自由になることである。アメリカの大学は、新しい経験を積む場であり、学生たちの多くは社会に抗議したりボランティア活動に参加している。これに対して日本の大学は、サークル活動やクラブ活動を通して、大人になるための人間関係を積む場になっている。これからの日本の学生たちは、家族、クラスメート、職場、更に国家をも越えたところで、大人としての新たな責任を創り出してほしい。

第17回 国際学生 セミナー

主題 地球時代の 生き方を求めて

開発と環境

⑥

▼ゲスト・スピーカー

自然と人工の物質とエネルギーの循環の系

菊地 靖氏

日本野生生物研究センター理事長

豊田由貴夫氏

佐藤大七郎氏

D ソ連・東欧の政治と環境問題

法政大学法学部教授

下斗米伸夫氏

日本の経済発展と森林利用
筑波大学社会学系助教

表 寿一氏

北畠佳房氏

▼運営委員

《委員長》

東京大学教養学部教授

渡辺昭夫氏

A 環境保全と日本のODA政策
東京国際大学商学部教授

松井 謙氏

埼玉大学大学院政策科学研究科教授

華民国・バン格拉デイス・ニュージール
ランド・アメリカ・チュニジア・韓国
(各1)

が、果たして両立するものなのであろうか。仮にその調和を見出す必要があるとすれば、どのようなやり方があるのだろうか」と説明された。世界15カ国から99名の参加者を得て白熱した討論が展開された。

②大学別(27校)
東京(13)、成蹊(11)、筑波・独協(各9)、慶応義塾(7)、津田塾・明治(各6)、創価・早稲田(各4)、青山学院・上智(各3)、東京外国語・長崎・中央・国際基督教・法政(各2)、千葉・東京工業・一橋・横浜国立・埼玉・東京都立・駒沢・日本女子・東洋英和女学院・スタンフォード・職業訓練(各1)、その他(3)

セミナーの冒頭の共通セッションでは、各セクション演習を担当する講師から次の通り発言があった。

核兵器で身を固めた米ソ二つの超大国が相互に優劣を競い合った冷戦時代が終わり、歴史が大きな転機にさしかかっている。しかし、その時代の終わりは単なる「普通」の時代への回帰でありそうもない。急激な工業生産と、人口の急増を遂げた二十世紀は、無窮広大といわれた地球の持つ限界が我々の視野に入ってきたのである。私達の行く手にある新しい時代を《地球時代》と表現し、そのような時代における生き方にふさわしいパラダイムを模索することが、今回から4回にわたって行なわれるシリーズ「地球時代の生き方を求めて」のテーマである。

第三世界の開発と地球環境保全はトレードオフの関係にあり、二つの課題を両立させることはきわめて難しい。開発の促進は環境破壊をもたらす。さりとて環境保全を重視しすぎると開発は進まない。海外経済協力基金や日本銀行などでの援助実務を踏まえながら実践的経済協力論を展開している松井氏は、「第三世界が先進国と同様のエネルギー多消費型の経済成長戦略をとっていく限り、非常に大きなコストがかかるので新たな開発戦略を模索する必要があるのではないか」と問題提起された。また中南米を中心に環境衛生の問題を現地を取り組んできた経験を持つ国際協力事業団の桜井氏は、「東京を中心に協力を進めるのではなく、現地の人々と一緒に取り組むべきだ」と根本的なODAの改革の必要性を強調された。

国際協力事業団国際協力専門員

桜井国俊氏

高木誠一郎氏

B NGOと地球環境保護

明治学院大学国際学部助教

熊本一規氏

慶応義塾大学法学部講師

添谷芳秀氏

文部省学術国際局留学生課長

廃棄物を考える市民の会代表

井手敏彦氏

中西釘治氏

サヘルの会農業技術者

生活クラブ生協理事長

C 開発と文化変容

早稲田大学理工学部教授

杉野二郎氏

河野栄次氏

①国籍別(15カ国)

日本(81)、ソ連(3)、オーストラリア・香港(2)、シンガポール・イギリス・インドネシア・中国・アルゼンチン・中

国別(15カ国)

インドネシア・中国・アルゼンチン・中

▼参加学生99名(内女子47名)

①国籍別(15カ国)

日本(81)、ソ連(3)、オーストラリア・香港(2)、シンガポール・イギリス・

インドネシア・中国・アルゼンチン・中

国別(15カ国)

田中稔久氏

中西釘治氏

添谷芳秀氏

高木誠一郎氏

渡辺昭夫氏

セミナーの冒頭の共通セッションでは、各セクション演習を担当する講師から次の通り発言があった。

第三世界の開発と地球環境保全はトレードオフの関係にあり、二つの課題を両立させることはきわめて難しい。開発の促進は環境破壊をもたらす。さりとて環境保全を重視しすぎると開発は進まない。海外経済協力基金や日本銀行などでの援助実務を踏まえながら実践的経済協力論を展開している松井氏は、「第三世界が先進国と同様のエネルギー多消費型の経済成長戦略をとっていく限り、非常に大きなコストがかかるので新たな開発戦略を模索する必要があるのではないか」と問題提起された。また中南米を中心に環境衛生の問題を現地を取り組んできた経験を持つ国際協力事業団の桜井氏は、「東京を中心に協力を進めるのではなく、現地の人々と一緒に取り組むべきだ」と根本的なODAの改革の必要性を強調された。

従来、地球環境問題はODAにもみられるように政府主導で提唱され、私達の日常実践、とりわけ国内での実践とは無縁なところで論じられてきたきらいが



シンポジウム——開発と環境は両立するか

ある。一九七〇年代の環境問題は大気汚染、水質汚濁を中心とする国内の問題であったが、最近ではグローバル化していると述べながら環境生態学が専門の熊本氏は、「日本では地球環境はNGOで、国内の環境問題は市民運動でと区別されているが、諸外国では国内の問題に取り組んでいるものをNGOと呼んでいる」と語義の違いに触れながら、「環境問題は国内、国外とを問わず両方が相互に交流し合いながら取り組んでいくことが必要だ」と指摘。

また有害廃棄物の越境移動が国際的にも問題となっているが、私達の身近なゴミ処理も年々深刻化し、グローバル化しつつある。にもかかわらずこの問題に対する私達一人ひとりの自覚は乏しく、一

向に解決の見通しが立たない。ゴミを単に焼却したり、埋め立てたりするかたちで処理するのではなく、住民の協力を得て徹底的に分別してリサイクルするとうい「沼津方式」で注目された元沼津市長の井手氏は、「このまま進んでいけば前途は全く地獄でしかない。二十年前に戻ってやり直すしかないが、人間の力で切り抜けられるという期待は全く持てない」と現状と未来に対する絶望感を表明された。

社会や経済の開発にさいしては、現地の「文化」を十分に配慮しなければならぬのだが、これまでの日本の援助は政治的效果をねらったり、経済効率を主眼としたものに片寄る傾向があった。パプアニューギニアをフィールドワークにしている文化人類学者の豊田氏は「文化人類学は現地に溶け込んで、原住民と同じ様な生活をしながら現地の社会や文化を理解しようとするが、援助問題でも現地の住民がそれをどのように受けとめているのかという「援助される側の論理」を配慮することが重要だ」と政府の開発政策や援助政策に文化人類学や地域研究成果を反映させるべきだと主張された。

ソ連・東欧では環境問題が、八九年の市民革命を生み出す母胎となったといわれている。東欧諸国の民主化が進行する中で、これまで秘密にされていた環境汚染の実態が白日の下に曝され始めた。今年になってすでに二回にわたって現地調査している生態学が専門の表氏は、「東

欧諸国では軍需産業を育てることが優先され、市民の生活環境は二の次にされていた。しかも公害の実態調査に関する情報も歪められて公表されているために環境汚染がいかにひどいものであるかを市民が理解できないでいる」と感想を述べると共に、この状態から急激に市場経済原理を導入すれば環境汚染はますますひどいものになるだろう、と前途を危惧された。

第二日の午後は、佐藤、北島両氏の講演を踏まえての「開発と環境」の関係をめぐるシンポジウムがあった。

まず日本野生生物研究センター理事長の佐藤氏は、「開発か環境か」の二者択一ではない両者のよりよき「妥協」が必要だと講演された。「桃太郎」という昔話の中でおじいさんが山に芝刈りに、おばあさんが川に洗濯に行くという話があるが、彼らの行為を森林破壊とか水質汚濁と言わないのは人工の系が自然の系のアソビの中におさまっているからだ。ところが人間は農業や牧畜をはじめて以来、自然の系から飛び出して、食糧を増産し、人口を急増させた。自然の系は人工の系に比べてアソビの幅が狭いために様々な環境破壊をもたらした」「自然の系と人工の系とを切り離して、自然保護を主張するだけでは貧困と環境破壊の悪循環を断ち切ることは出来ない。もし先進国が途上国に対して熱帯林を伐るなど主張するならば、途上国の貧困と環境破壊

の悪循環を断ち切るために、人工の系の中のモノの移動を発達させること、つまり彼らが森林を伐らなくてもすむように先進国が物資を援助することが必要だ」と環境保全だけを叫ぶのではなく、人工の系のあり方を変えることによって開発と環境の妥協点を見出すべきである。

続いて、国立公害研究所で長く環境経済学の実証的研究に取り組んでいた北島氏は、開発と環境保全のミスマッチを回避する具体的方策について講演。「貴重な生態系を守るためには、各地域を孤立させ、個別に問題解決に取り組むのではなく相互に関連づけることが大事だ。そのためには環境保全のために全く手を付けない特別保護区（コアゾーン）と都市的土地利用との間に、ある程度の開発との接点を求める開発移行区域（バッファゾーン）を設ける、という一九七四年の生物圏保存計画の考え方が参考になる。これまでの日本の国立公園の線引きでは、コアゾーンのすぐそばに開発区域があったりするが、バッファゾーンの結果たす役割を見直すべきだ」「現在需要があるからといって無制限に熱帯林を伐採していけば、到底全世代の需要を満たすことが出来なくなる。木材価格には伐採費用や多少の運賃に利潤が加えられているが、さらに木が立っている状態そのものにも価値をつける必要がある」「開発途上国の累積債務を先進国のNGOや世界野生生物基金などが買い取って現地政府に熱帯雨林の保存を義務付けるネイ

チャースワップによって環境保全のための資金を念出する」などの具体的方策が紹介された。

ティー・タイムを挟んで行なわれた議論の中で運営委員長の渡辺氏は「技術改善、既存文化の尊重、社会的不平等の緩和、環境援助などの方法を工夫することによって持続可能な開発 sustainable development をめざすことが地球時代のニューパラダイムではないか。これに対して、この程度のパラダイムの転換では根本的な解決にはならない。成長の限界はすでに過ぎてしまっているので、これまでの開発の道はとって返せないのではなく、とって返さなくてはならないという主張もありうる」と問題群を整理された。

また第三世界の開発に伴う環境破壊の大きな原因の一つとして貧困が指摘されているが、先進国の経済圏に巻き込まれたことよって資源を自らの手で管理・利用できなくなったことも原因であることを見逃してはならない。「途上国の地域住民が自分達で地域の資源を管理し、自分達の生活に活かしていけるようなシステムを作ることが一つのポイントだ」（熊本氏）と南北の支配・非支配の垂直的関係構造についての指摘もあったが、それ以上の議論の展開はみられなかった。シンポジウムでは、セミナリーの英語タイトルで表現されたいわゆる「開発派」と「環境派」の対決はなく「持続可能な開発」という考え方に沿う発言が多く出された。

物質的な豊かさを享受している私達が持続的開発を目指すといっても、「途上国側にとっては飲み水が安全ではなく、し尿が始末されていないという環境衛生の課題がまずある。その上に工業化に伴う大気汚染や森林伐採による砂漠化などの問題がある」（桜井氏）のも現実であり、こうした現地の人々の差し迫った生活課題を踏まえながら、私達はこの問題に取り組んでいかなければならないだろう。

◇ 最終日には、各セクションで行なわれた演習の報告と総括討論があった。

まず環境保全と日本のODA政策を議論したAセクションからは「環境破壊につながるような大型のプロジェクト援助ではなく木目の細かい援助を実施する一方で、途上国が環境問題に取り組むことができるよう環境配慮のための体制作りを支援することが必要だ」との報告があった。

次に地球環境保護に取り組んでいるNGOの活動を中心に議論したBセクションからは、①ゴミの量が飛躍的に増大し、地球規模の環境破壊につながっている今日、もはや分別収集、リサイクルなどの対症療法ではすまない。ゴミを出さないシステムづくりを目指す時代に入っている②サヘル地方の人々は日々の生活に追われ砂漠化を防止しようという意識がないが、飢餓にあえぐ彼らの生活をよくするために砂漠化を少しでも遅らせる手段として有用樹の植林に取り組んでいる

③牛乳でも野菜でも消費しているモノの出所を知ることが環境問題につながる。

日常生活の延長線上の問題として生活の場から環境を考えることが大事、との報告があった。また日本のNGOは活動の基盤が脆弱であるといわれているが、「専門分化させて資金にめどがつけば規模を広げなくても継続的に活動していくことはできる。しかしそれでは一部の先鋭的な活動になってしまおうという懸念がある。広く市民を巻き込むかたちでの運動展開が課題だ」（杉野氏）との指摘も紹介された。

開発と文化変容の問題を扱ったCセクションからは、①開発に伴うデメリットを事前に予測し、被害を最小限にするには現地の意見を重視しなければならないが、実際には統治勢力と非統治勢力が分化していて住民の意志を反映させることが難しい②日本は援助に際して単なる要請主義ではなく、優勢な文化勢力としての自覚を持つ必要がある。世界の中で日本文化の位置を問い直すような開発教育を行ないながら日本の援助理念を作っていくしかない、との報告があった。

社会主義国における環境問題を扱ったDセクションからは、①社会主義の中央指令型の計画経済システムでは、それをチェックするメカニズムが欠落しているために環境破壊がもたらされた②市場原理の急速な導入は環境への配慮を欠いた私企業の活動が活発化し、さらに環境破壊を深刻なものにする恐れが強い、との

報告があった。

以上の報告を受けての全体討論では、①国家単位でなく、地域レベルで環境問題に取り組むべきだ②政治的、イデオロギー的な戦略援助ではなく、地球全体にとってプラスになるものを支援するという意味での戦略援助が必要ではないか③日本の経済発展のプラス面ばかり強調しないでマイナス面もきちんと整理して伝えるような開発教育を行なうべきだなど様々の意見が出された。

社会の様々な領域でボーダレス化が進行し、地球社会という観点から物事を考えなければならぬ時代に入っているにも拘らず、依然として私達は既存の国家単位での認識枠にとらわれている。地球時代における生き方を模索していく時に大事なことは、渡辺氏が閉講で指摘されたように単なる利己主義からではなく、「自分の利益を守るためには途上国のこと、地球全体のことも考えなければならぬのだ」という明確で、強固な意志と自覚を持つことだろう。このことを忘れた経済協力も環境保護もサロンのだけの理想論、かけ声に終わってしまうのではないだろうか。

*なお本セミナリーの詳細は、学生編集委員による『報告書』（4月刊行予定）をご覧ください。

千人会

90年9月～11月

◇現在会員一、四六四名(実会員数)

(通算入会者一、八二五名)

◇新しく会員となられた方々

- C 日刊工業新聞社 長谷川 至弘殿
- B 大東文化大学教授 鈴木 一道殿
- C V 研究会 吉本 昌司殿

◇会費ありがとうございました。

- 下田弘、山本武彦、荻原洋太郎、大福族生、長尾龍一、榎林博太郎、寺川国秀、林泰造、村上陽一郎、武澤信一、朽津耕三、林勲、児玉久雄、沖塩莊一郎、島岡丘、滝口亨、木村宗男、石村善助、黒田まゆみ、三村卓雄、松田徳一郎、出居茂、奥田眞丈、井深淑子、高村多賀子、石井竹松、西村善四郎、谷俊治、古屋野正伍、大澤網一郎、土屋哲、後藤米夫、岩崎不二子、石橋秀雄、横山宏、千葉正士、石井彰、岡村秀男、平澤茂一、安嶋彌、関本昌秀、久武雅夫、加藤五六、松田武彦、尾形憲、鞍馬菊枝、鈴木守、朝倉孝吉、武藤英輔、小堀巖、川田侃、鈴木忠義、鈴木俊和、小川智哉、池上秋彦、佐藤豪、大谷登志雄、小林祐子、増田茂樹、小堀桂一郎、大東百合子、吉利和、伊東一江、青柳清孝、森岡敬一郎、都留春夫、塩見利夫、鈴木務、永井克孝、東寿太郎、小田切美文、末松安晴、岡野澄、伊能敬、関口利男、釜薮善一、色川大吉、竹内啓一、小林善彦、沖中重雄、平野健一郎、神田信夫、長津一郎、矢吹普、松田千鶴子、井手久登、岡村甫、平野敬一、朝日信夫、神戸愉樹美、前川真理、大竹誠、鈴木喬、笠井伍朗、酢屋善元、飯田経夫、田村康男、布川角左衛門、小川信子、井門富二夫、田村献、天利長三、五十嵐香、松岡八郎、森井眞、岡茂男、井関利明、篠崎啓助、小和田恒、板垣與一、木村富夫、末岡俊二、堀光男、田村恭、宮野彬、新田悟、今井淳、鈴木順子、鶴岡義一、坂井昭宏、戸田盛和、伊藤成彦、伏見弘、森岡清美、大貫一、鈴木一道、高橋三郎、秋

- 田成就、白井常、山田耕司、小川捷之、久場嬉子、高村弘毅、坂野鏡司、牧内操、稲垣寛、小田中敏男、蒔盛晴、横田英嗣、福田隆義、麓信義、田端光美、貝塚爽平、須田精二郎、鬼塚宏太郎、岩下秀男、藤村瞬一、川原栄峰、佐藤公江、田島澄江、久留都茂子、中澤正和、田村院司、祖父江孝男、太田時男、小林澈郎、山本登、高野雄一、若林俊輔、大須賀節雄、速水清、篠沢公平、八木江里、宇野重昭、佐藤健生、伊藤玄三、吉武泰水、宮川俊彦、川鍋正敏、松田稔子、末永国明、鳥袋嘉昌、吉澤英子、森田信義、小田滋、飯野利夫、笹島恒輔、戸張よし子、宮田登、山下幸夫、田原虎次、山本よしゑ、八戸信昭、木下是雄、能川忠、米満澄、柴田菊代、隈部直光、勝木保次、福井憲彦、田中外次、安藤瑞夫、竹内与之助、速水佑次郎、梶木隆一、岡惺治、谷重雄、森繁雄、納富照枝、青木生子、小松八郎、石川明、山岸健、高木仁、松元文子、増田義男、横山実、今井哲哉、浅見一羊、戸田三三冬、生山智己、加藤一郎、外池孝雄、内藤正、茂木誠陸、尾田幸雄 (敬称略)

◇千人会員からのたより

私はこの年齢になって却って丈夫になり、この夏の暑さにも閉口垂れません。

武蔵工業大学名誉教授 下田 弘

最近些か疎縁になり、自分でも残念に存じております。せめて一年に一回の御縁を存じます。

東大先端科学技術研究センター教授 村上陽一郎

いよいよ三月で定年を迎えることになりました。その後もご縁が続くことを願っています。

立教大学教授 武澤信一

拝啓 '82年よりパリに出張、以後、'85年の停年(東大)、三重大勤務など節目々々に想い出しながら10年近くすぎました。おわびもかねてとにかく10年分として参万円おくらせて頂きます。若い学生(明大)をかかえ、セミナー・ハウスの雰囲気を彼らにもこれからすわせた、よろしく願っています。

明治大学教授 小堀 巖

三年前に慶大工学部を退職し、金沢工業大学で学長を勤めております。

佐藤 豪

在外中のため遅くなりました。新館長のもと御発展をお祈り申しあげます。

東京大学教授 永井克孝

今回よりB会員にさせて頂きます。

東京工業大学学長 末松安晴

ローマ日本文化会館館長としてイタリアに居ります。

一橋大学教授 竹内啓一

今春、小著「近代日本の政治と法の理論」を出版し、これまでの研究の区切りをつけましたが、66歳の誕生日を迎え、これからも頑張っていきたいと思っております。

東洋大学教授 松岡八郎

海外出張のため遅くなり申し訳ありません。

外務省審議官 小和田恒

岡先生が館長になられた旨は、前のニュースで伺っておりますが、これでセミナー・ハウスが急に身近に感じられるようになりました。

放送大学教授 祖父江孝男

いよいよ年が明けると早々に引越しの作業が始まり、4月には新しい八王子の地で開学となります。近くなります。何卒よろしくお願い申し上げます。

東京都立大学教授 小林澈郎

誕生日カードをありがとうございます。まずは元気でアントロピエの歴史を追求中。

東洋大学教授 八木江里

大学セミナー・ハウスが各大学の学生にとって心の故郷として発展されますように。

慶応義塾大学教授 山岸 健

寄付金 報告

90年9月～11月

◇(一般寄付金)

一〇、〇〇〇円 順天堂大学医学部附属 順天堂医院殿

◇(教育プログラム資金)

- 一三、七六五円 第17回国際学生セミナー殿
- 一一、二五〇円 第153回大学共同セミナー殿
- 九、〇〇〇円 聴講者 加藤みつ子殿

◇(植樹)

- はなみずき(赤)1株 筑波大学人間関係ワーク ショップ・リユニオン殿
- はなみずき(赤)1株 日本小児神経学会卒業教育委員会殿
- はなみずき(白)1株

寄附 書贈

90年4月～91年1月

◇「グルムク・スインクの遺言」

大同生命国際文化基金殿

◇「新しい教育学」

尾形 憲殿

◇「現代中国の黎明」

加々美光行殿

◇「野獣と天使の間で」

内田 満殿

◇「オセアニア島嶼国と大国」

三輪公忠殿

◇「わがふるさとのインド」

平凡社殿

◇「詩集 朝の魔物」

梅本育子殿

◇「松井源吾作品集」

松井源吾研究室殿

◇「明日の女子教育を考える」

日本女子大学殿

◇「近代史を拓いた女性たち」

日本女子大学殿

◇「「サロメ」の変容」

井村君江殿

◇「日米関係史研究Ⅱ」

学習院大学殿

◇「キリスト教年鑑一九九〇」

基督新聞社殿

◇「国際条約集一九八九」

苑原俊明殿

◇「ナンラム タイ作家・詩人選集」

大同生命国際文化基金殿

◇「現代のエスプリ」

学校に行けない、神保信一殿

◇「登校拒否がわかる本」

神保信一殿

◇「製造業に関する報告書」

田島恵児殿

「場」としてのセミナー・ハウス

大学セミナー・ハウス館長

岡 宏子

〈セミナー・ハウス新春事始め〉

セミナー・ハウスの新春事始めは、一月五日、全職・従業員一堂に会しての、理事長挨拶とそれに続く昼食会。改まった気分のあと、和やかなそして賑やかな歓談のひとつを過ごすことで、その幕を明けたが、このあと私は、厚生省心身障害研究の岡班の二十四名と、「かかわりの発達と歪み研究」のまとめをすべく一泊二日の合宿に入り、利用者として、平成三年のハウスの活動はじめてに参加することになった。

まだ松の内のこと、人影も少ないキャンパスは、青い空と、それに突きさすような雑木の冬木立、くつきりと白い姿の富士など、その自然のすべてが、いかにも、「この自然はみんな、あなたたちのものですよ」と呼びかけてくれているようだし、仕事はじめの緊張と和やかさを全体に漂わせての職員の応対ありで、何とも言えない贅沢なもてなしのなかにとっぴりと浸った気分になったものである。

この感じ方は、グループのひとりひとりでは少しそのちがいはあるものの、解散前の散策のひとつとき、一人が口にした「さつきから、この満足感は一切何なのだろうと考えていたのですが、……これが、心の贅沢ということなんです」の言葉で、皆いっせいに、「そうなんだ」と頷

いたというわけなのである。

「心の贅沢」、これこそセミナー・ハウスが、ここに集う人々すべてに味わっていただきたいことそのものであり、またそのような味わいを、何時も、そしてどなたにも提供できる「場」としての機能を、何とかして十分に発揮出来るように…の思いが、Doppel-Gangerとしてそこにいた、私の領きであったのである。

〈自然・施設・人のつくる場〉

セミナー・ハウスの自然、それは文句なしに美しい。雑木の美しさは、空につき立つ枯木立も、秋の紅や黄に染まった葉が陽の光をうけて輝く時も、夫々の味わいがあるが、もうすぐ訪れる春のはじめ、白、薄緑、黄緑、そして灰色の、その木その木に特有の色合いを含んでの芽吹きの際の十日位の間は、時に、ハッと息をのむ思いがするものである。

その雑木の間には点々と、場所によっては所狭しとばかりに、草創の頃から現在まで、思索し、討議を重ね、何かを発見し…の数多くの集いのしるしの木々が、繁り、花を咲かせ、実をつけ、野鳥がそれを啄む。その間を小路や、やや広い道が、上り下りしながら、ハウスの建物へと導いていて、歩く者にいろいろと語りかけるのである。

ところが、この同じ自然が、その中に在る人に、時と場合、立場の転換、又はその人の心情や要求のあり方によって、「場」としての作用をまるで異質のものにしてしまう。この日、合宿者としてセ

ミナー室で討議を重ね、その息抜きに一福亭で眺めまわす私に、語りかけてくる自然は、どれという特定は出来にくいだが、セミナー室の熱気の中では考えつかないような新しいまとめの筋道を、ハッと思いつかせる働きをしてくれたようである。でも、まだ短い在任の体験ながら、館長室で一しきり仕事をし、次に来館の先生とお目にかかるべく外へ出、同じ木々の間を通っていく時、この自然は私に、そんな働きかけをしてくれない。というよりは、私の自然との接し方それ自体がちがうといったほうがいいのかもわからない。

極端な例で言うくと、錦秋の美とめでた紅葉や枯葉が、晩秋の嵐で建物の樋につまり、大雨の日の館の水漏れ騒ぎとなると、職員たるもの、自然の働きかけは、心の贅沢どころか敵に化してしまう。その対策の先端で作業をする職員が、全身水をあげ、頭も服も水びたし、という場面では、来館者にはハウスの貴い自然とうつり、その人の感性に働きかける力と感じられる環境は、実は、こんな人の仕事によってつくられていく人工的環境であることを、心に強く、重く、感ぜずにはいられない。

ハウスの自然の中に散在する建物、合宿者の居住空間であり、寝食の、そして思索の場である施設にもまた、同じようなことがいえる。絵のように自然の中に散在する建物も、その設備も、居住空間としては、贅沢さを提供するというわけにはいかず、現代の機能的な設備十分の

他の宿泊施設とは比肩することはむずかしい。設備はいいに越したことはない。時には不備や不便さを感じさせるかもしれないものとしての建造物やその機能を、場としては、心の贅沢につなげることが出来るように、脇役たちの作用が協同して働くことを可能にする条件の数々もまた、ハウスには存在するのだと思う。

〈場づくりの人間的条件〉

「場」とは、ただ存在する空間、空間を占める物的条件の構造を意味するのでなく、そこにある人に、現実に関わりかける作用としての機能的な環境のことを言うことは、心理学では、といわずとも大かた、ご承知のことであろう。ある人にとっての場の機能は、実に諸々の条件が絡みあって構成されているのである。

ハウスが利用者に提供し得る場を考えると、その自然や施設をよき場として機能させる条件の第一は、実はセミナーの機能そのものにあると言える。一つの目的に向っての教授、学生の集うことそれ自体が、ハードとしての環境の働き方に大きな力を与えるからである。そこで生れる知的興奮には、自然の作用が働きかけ、新たな感性を触発し、更にかつて植えた木がなごみをもたらす。来館時の対応によって、セミナーの滑り出しが滑らかなになったり、食事の満足度が、次の討議にまた響くのである。こんな次第で、「心の贅沢」につながる場の提供のために、自然・人・集いの合力のあり方を今、職員とともに考えている所なのである。

国際社会の歴史的変動と セミナー・ハウスの役割



東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

一昨年四月に北京で起った空前の民主化運動は、六・四「血の日曜日」事件という深い傷を中国社会にもたらした。その惨劇に世界の人びとは驚き、怒り、そして悲しんだ。しかし、別の角度から眺めると、中国のその悲劇が東欧を救ったのであり、中国とは対照的に、しかも中国の悲劇の代償として、ルーマニア以外では一滴の血を流すことなく、東欧社会主義は崩れていった。私自身、天安門事件に関して全力投球で短時間のうちに著書を書き下したのちに東欧へ行き、ベルリンの壁が崩壊する直前の東ベルリン、フンボルト大学で中国問題のセミナーをやった。カール・マルクスにもゆかりのあるフンボルト大学の知識人たちは、当時、東ドイツがホーネッカー独裁体制下であり、中国の民主化抑圧を支持する立場だったので、東ドイツの民主化・自由化が始まると東ベルリンで第二の天安門事件が起きはしないかと真剣に恐れていた。しかし、ホーネッカー議長は、鄧小平氏の轍を踏むことなく、みずから城を明け渡したのである。

東欧が社会主義から脱して西側化したことは、昨年九月上旬のドイツ統一をも

たらし、ヨーロッパは見る間に大きく変わったが、このような歴史の変動がソ連のペレストロイカにも影響を与え、ソ連社会もいまや大変動期にさしかかりつつある。一昨年十一月にはそのようなソ連の科学アカデミー極東研究所に招かれて講演したあと、モスクワから北京へ飛んだ。いまだ戒厳令下の北京は天安門事件の爪痕も生々しかったが、中ソ関係はさらに積極的に改善されようとしていた。ソ連の側も東欧が急激に変動し、共産党体制解体の動きがすでにモンゴル人民共和国にまで及んでいるだけに、いままでは中国まで東欧化してほしくないと思音では思っている。中国や北朝鮮が社会主義を断固として擁護すると唱えていることが、この点でソ連にいわば安心感を与えているといえよう。

社会主義といえばカストロ首相率いるキューバが強硬な原則論を堅持していたが、そのキューバでさえもいよいよ政治改革を進めようとしており、そうなるに残るのはいよいよ中国と北朝鮮ということになってきた。その北朝鮮へは昨年五月のメーデーの時期に一週間訪れた。平壤では北朝鮮のルーマニア化の可能性も含めて、北朝鮮の指導層の人びとと長時間論じあったが、「チュチュ（主体）思想」を護持する金日成Ⅱ金正日父子権力下にある北朝鮮は、一種の「宗教国家」であり、様々な点で社会主義というよりむしろ儒教的権威主義体制ではないかと思われた。しかし、その北朝鮮も中国も

いよいよ革命第一世代指導者の退場期をまもなく迎える、その時期を経て、社会主義の一元独裁体制は、中国でも北朝鮮でも、やがてに崩れてゆくのではあるまいか。

このように、一昨年から昨年にかけては、社会主義解体の方向に歴史が大きく、しかも根本的に変化した。

このような歴史の変動に立ち合えたことは、大変に臨場感を伴うことであった。この間、当大学セミナー・ハウスは、さらに発展し充実してきている様子でありとても喜ばしい。開館二十周年記念のインターナショナル・ロッジも多くの方々の御努力で見事にオープンした。私は運営委員の末席にありながら何もできなかったけれど、一つだけ協力させていたことがあった。それは、「インターナショナル・ロッジ」という名前についてである。と言っても、別に特別なネーミングでもないし、私がたまたま運営委員会で発言した名称が合意を得たにすぎないのだが、そのとき「ロッジ」という言葉が出てきたのは、いまからもう四半世紀も以前に私が最初に参加した国際会議、アメリカのウィリアムズバーグで開かれた「日米円卓会議」（日本側は亡き松本重治氏を団長に故笠信太郎氏、故桑原武夫氏、アメリカ側は亡きライシヤワリー氏やD・リースマン教授、R・スカラピーノ教授ら）のときの宿舎がなんと忘れがたい素晴らしい雰囲気「ロッジ」だったことを思い起こしていたから

であった。

当セミナー・ハウスのインターナショナル・ロッジも立派に竣工したのでさらに充実したセミナーが開かれるようになるであろう。私も十年程前まで、国際プログラム委員会の委員長として国際学生セミナーをお手伝いさせていただいたが、ある冬の日の光景がいまも脳裏に焼きついている。連日連夜のセミナーで全員が精力を出し切り、しかも途中、指導教授と学生とのあいだのトラブルがあたりかなり緊張した。しかしそれらがすべて克服され、最後には当事者だったA大学の女子学生Bさんのピアノ伴奏で蛍の光の大合唱となった。思わず目頭が熱くなって大食堂の窓外をふと眺めると、雑木林を透して富士山が実に美しかった。

このような私自身の体験を含めて、当ハウスのプログラムは、まさにインター・キャンパスのユニークなものなのだから、ここでの受講が正規の授業同様の単位として各大学で認められるようにすべきである。文部省の基準も最近は社会情勢に対応してかなり柔軟になりつつあり、大学設置基準さえ見直されつつあるのだから、運営委員会で検討していただき、まず私大を対象に、働きかけてみてはどうだろうか。

当ハウスの事情に精通された岡宏子・新館長のエネルギーが素晴らしい御手腕に大いに期待したいと思う。

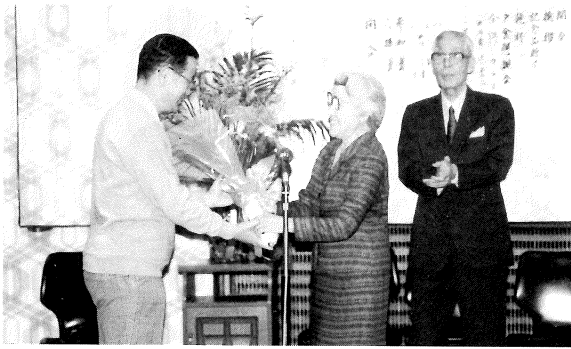
(90・10・30記。但し文中の年は91年を基点に改めました——編集者)

業／務／通／信

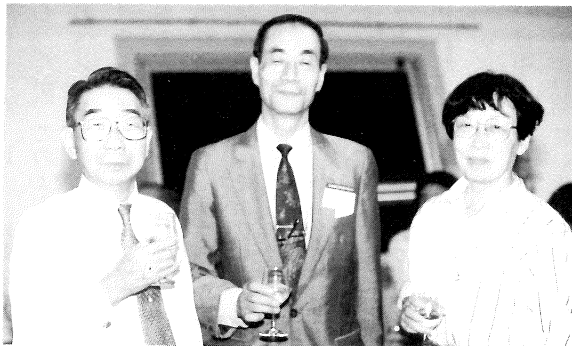
90年9・10・11月
秋3カ月の合宿研修から

例年9月のなかば、夏休み終盤に集中する私立各大学の合宿が一段落する頃、構内の萩が秋の訪れを告げる。そして雑木林が黄土色に移り行く10・11月には、学術団体の主催する学会・シンポジウムや社会人の研究会などが比較的多くなる。90年の秋3カ月に実施された合宿は三一〇回（月平均一〇三回）、宿泊利用者は一万二、五七二人（同四、一九〇人）であった。以下、秋のキャンパスからいくつかトピックスをお届けしたい。

●さまざまな卒業前合宿研修



25年の利用に感謝して——順天堂大学「病院業務改善セミナー」の生みの親・小林裕一事務部長に花束を贈る岡館長。右は飯田名誉館長。（'91.10.13. 講堂）



ショウジョウバエの研究集会「ドロソフィラ・ミーティング」で——左から吉田幸弘、北川修、戸張よし子の諸氏（'90.10.6. 食堂）

秋から冬にかけては、「卒論指導」「卒論中間発表」をはじめ、最終学年を対象とした合宿研修が目立つ。学科単位の合宿では東京純心女子短期大学音楽・美術・英語各学科合同の「卒業研修会」（198名）もその一つで、同校の学生は全員がオリエンテーション・キャンプとあわせて入学時と卒業前と、ハウスで最低2回の合宿を体験することになる。玉川大学の外国語学科が9月中旬ハウスで初めて実施した「卒業研究研修」（英・独・仏語の計22ゼミ231名）はもう一つの例であるが、ここではゲストによる特別講義、文章（論文）の書き方」に熱心に聴き入る学生たちの姿が見られた。

個別ゼミナールの「卒論合宿」で特筆したいのは放送大学阿部斉ゼミの「卒業研究の中間報告」である。参加学生の16名の年齢は20代から60代。それぞれが準備した社会と経済に関する「専攻特論」を発表する。仲間からの質問を受け、阿部教授から指導・助言を受ける——熱のこもった討議の後は、ビールを交わして懇親の一刻を持った。日頃はそれぞれの仕事に従事する傍ら、ブラウン管での放送指導や通信指導などの間接的な個別学習によらざるをえないこれらの方々にとって、起居を共にしての面接授業や集団学習の中の直接的なコミュニケーションや交流の体験は、特別に有意義であろうことが想像される。3人の方に記念館での週末の一泊二日の感想などを「わたしたちの合宿」（14頁）に綴っていただいた。

●ハウスと共に25周年を祝う

秋の恒例となった順天堂大学医学部附



日米品質管理専門家会議——右端は狩野紀昭教授（'90.9.16 教師館サロン）

属順天堂医院の「病院業務改善セミナー」が今年も10月中旬の週末に行なわれた。医師と約20の部署からの職員18名が一体となって参加し、懸田理事長、石井学長、山内病院長らも早朝の開会式と特別講演に出席のため来館された。開館以来文字どおりハウスと共に歩み続けてこられたこのセミナーも、今回25周年を迎えた。その夜は記念のパーティが盛大に催され、ハウスからも岡館長ほか関係職員が招待を受けて出席し、長年の変わらぬ友好関係に感謝を表した。なお、同セミナーの発案者で、以後一貫して総指揮をつとめてこられた小林裕一事務部長は、今春退任されるので、これが最後のセミナーとなった。席上、同氏の功労に感謝してハウスから花束が贈呈された（上掲写真）。また、同セミナーの発足からの親交を結んだ飯田宗一郎名誉館長の傘寿を祝して、小林部長から同氏に記念品が贈られるなど、友情あふれる祝賀の集いであった。

●小児神経学セミナーは「20回」

日本機械学会が「スポーツ工学シンポジウム」（36名が2泊、日帰りを含めると100名）を、日本セラミックス協会が大学と企業の研究者による「セラミックス・セミナー」（52名が2泊）を開催するなど学会の利用が相次いだ。「ドロソフィラ・ミーティング」（82名）はショウジョウバエに関する学術研究会で、都心で開かれた学会の大規模集会に引き

「小児神経学セミナー」に 20回連続参加して

東京女子医科大学小児科講師
長島 忠昭



20周年を祝った小児神経学セミナーの参加者たち (’90.9.23 本館前広場)

毎年、秋深くなる頃開かれるセミナーの三日間は、ひたすら小児神経学へ没頭できるまじりない機会です。全20回に及ぶこのセミナーの、戸外での参加者全員が集まった写真を見てみると、この間雨風に邪魔されるのが少なかったのは幸運であつたとつくづく思い返しています。

第1回セミナーの高揚感に触発されてからは、毎年秋が近づくとセミナーに参加したいという気持ちが湧き上がって来るため、とうとう連続参加を果たしてしまいました。

この度の20回セミナーでは、当セミナーの生みの親、育ての親であられる東京女子医科大学小児科福山教授より「これからの小児神経学の展望」と題された心に残る記念講演を頂きました。

その冒頭で、先生は、第1回セミナーにおける参加者一同の小児神経学への意欲の高まりは、恰も、嘗ての「松下村塾」を思わせるばかりであつたと述べられました。

そもそも、小児神経学は、発達障害克服にかける情熱に支えられて発展してきたのではないのでしょうか。当セミナーも回数を重ねるに従って、現代社会のニーズと期待を背負いながら、「発達療育」への検討が次第に濃く前面に現れるようになり、人類文化の進展とともに熟してゆく医学の本質に触れる思いでした。

このセミナーにおけるグループディスカッションのテーマとして「発達療育」が既に4年前から取り上げられていましたが、それを受けて2年前から小児神経学会総会においても、「発達療育」のレクチャアが行なわれるようになりました。

漸く、重い発達障害を負つた子どもたちへ深いまなざしを向ける医師たちが輩出して来ていることを知り、このセミナーの持つ役割の大切さを実感している次第です。

こうして20年間この地に心を寄せて来た私の感謝の意をこめて、次の句をセミナー・ハウスに捧げることになります。

落葉踏む
思索の糸を
手操りつつ

(落葉踏むことが思索への誘いと知るや、受講の疲れのあい間を縫って、雑木林を洩れる陽の斑の静けさを肩に載せては辿る小道なのでした。)

続き、より親密な研究交流の場をハウスに移した専門部会。開館当初からの常連である東京都立大学「遺伝学ゼミ」の北川修、戸張よし子両教授や吉田幸弘・都立川短期大学名誉教授ら(前掲写真)

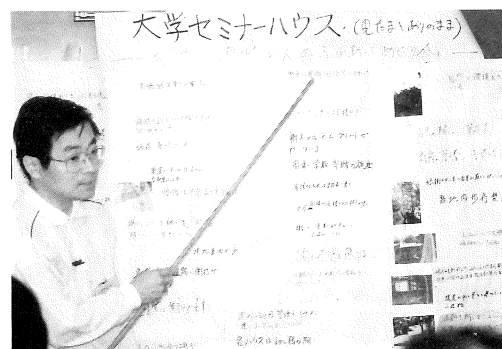
が誘致して下さった集会である。

日本小児神経学会の卒業教育委員会が主催する「小児神経学セミナー」(186名が2泊)の第1回がハウスで開催されたのは71年のことであつた。発育途上の神経の障害を研究・治療する小児神経学は当時急速に開拓されつつあつた新領域。大学でも独立の講座科目になつていなかった中で、同学会がこれを補強すべく医学部や若い医師のために卒業教育セミナーを企画したのがその発端であつた。

以来毎年、全国各地の病院の勤務医、開業医や学生が、深い同僚意識をもって参加し続けた。このセミナーは、後年関西地区大学セミナーハウスと隔年ごとに開催されるようになったが、今回で通算20回を迎えた。同セミナーの育ての親である東京女子医科大学の福山幸夫教授が「小児神経学の展望」をテーマに記念講演をされ、第1回以来の参加者らは深い感慨をもってその20年を回想した。そのお一人で、連続20回の参加を果たした東京女子医科大学講師・長島忠昭氏が感想(別掲)をお寄せ下さつた。

●紅葉の季節の国際交流

秋3カ月の国際集会は、学生、研究者両レベル各3、計6件。ここでは後者を



「私たちの見たセミナー・ハウス」を研修テーマに——肥後労務管理事務所主催の顧客企業トップマネジメントセミナー (’90.11.17 記念館)

ご紹介する。①日米品質専門家会議(12名)にはPMI社長シュルツ氏らアメリカ人7名が参加。東京理科大学の常連・狩野紀昭教授の主宰で、日本では初めての会議(前掲写真)。②ユネスコ・アジア文化センター「アジア・太平洋地域出版技術コース」(29名が2泊)で19ヶ国からの図書・出版関係者が来館。夕食のテーブルで在泊者に紹介され満場の拍手を受けた。③日本パキスタン協会主催の「シンポジウム・パキスタン’90」(57名)は今年で5回目で、テーマは「人とくらし」。毎回教師を含む各界からの参加を得て開かれ、また、今回も駐日大使館員らパキスタン人数名が来館した。なお、本号の『私の国際交流』(別掲)には常連のお一人で、登山家としても長年パキスタンと深いかわりを持つ広島三朗氏(『地球の歩き方・パキスタン編』の著者)から一文をお寄せいただいた。

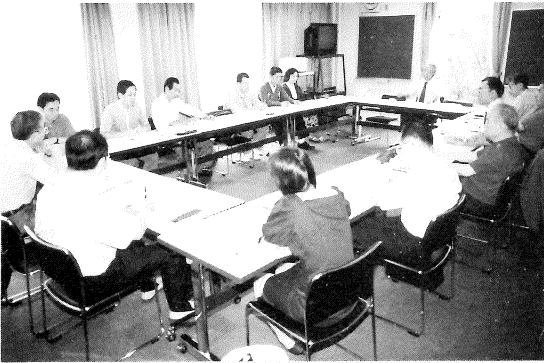
わたしたちの合宿

放送大学・専攻特論研修

54歳のチャレンジ

千葉県富津市 石井 三郎

我々放送大学に学ぶ十数名は、九月八・九日の一泊二日で記念館を利用していただき、阿部斉教授の指導の下で、研修合宿を行った。静かな木々に囲まれた環境の中、各自が自分のテーマにもとづき卒論内容を発表し仲間からの質問を受け、また阿部教授から適切なアドバイスを受けて大変有意義な時を過ごすことが出来た。熱の入った意見交換で大幅に時間をオーバーしたが、終ってからみんな飲んでビールは格別であった。我々は学生とは言え年代も二十代から六十代とさまざまである。しかも仕事をもちながら一人で勉強することは時につらいこともある。しかし私は五十四歳で六年間自分の好きな政治学を学ぶチャンスが放送大学で得られたことに感謝している。皆様にも是非入学をおすすめし、御礼のことばとしたい。



卒論内容の発表をもとに議論する。年齢も職業も様々な学生たち。正面は指導の阿部斉氏。(90.9.9. 記念館)

貴重なアドバイスに感謝!!

東京都足立区 栗本 都子

参加者十六名は、それぞれの用意したレポートを中心に発表、意見交換をしましたが、私は初めてのこともあり、あがってしまいました。指導教官の阿部先生のすばらしい質問や適切なアドバイスは、今後の卒論完成に大きな力となり、とても感謝しています。

また、緑豊かな自然の中に作られたセミナー・ハウスは、かわいらしいキノコ型の屋根をした建物や、中には入りませんが図書館などもあり、若者たちが元気に笑う声がとてとても明るくて素敵でした。久しぶりに合宿をしたのですが夜十一時までバッチリ議論した後の交流会も、とても楽しいものでした。多くの経験をもった方々と話しをすることは職場や家庭とは違い、ましてや政治学の立場から論議したことは、見方をひとまわり大きく出来たと思っています。あと二カ月の卒論提出までに「GO」の気持ちで帰ってきた私です。ありがとうございます。

生涯学習にも貴重な場

千葉県船橋市 長谷川 至弘

私は90年度「阿部卒論グループ」の一人として、九月八・九日の八王子セミナーに出席したが、その前日の七日八日にも、同じ放送大学の八八・八九年度の「中堅卒論グループ」の一員として佐久セミナーに参加した。これは佐久市役所の会議室で行なわれたが、参加者は成年だけであった。八王子セミナーの方は、未成年者もまじっていた。どちらのセミナーも中東の戦場とは対照的に、自然の中の平和がとて貴重に思われた。貴重な場所の存在に価値を感じた。

放送大学・放送教育開発センター「共同セミナーハウス」の建築計画が進められているとき、大学セミナー・ハウスのように「大学教育に社会が参加する」「国公立大学の連帯を深める」かもしれない。放送大学の学生は放送授業・通信指導での間接的な個別学習が多い。面接授業・卒論指導・サークルの集団学習で交流の機会がある。だ

がコミュニケーション不足による悩みもある。セミナー・ハウスが卒論の研究会や同期会での生涯学習にも、直接的な交流・伝達をしうる貴重な場所として価値ある存在だと思

私の国際交流

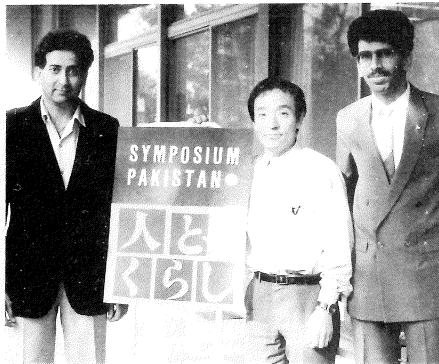
彼らの真の生活に迫りたい

5回目を迎えた「シンポジウム・パキスタン」

助日本パキスタン協会企画委員
相模台工業高校教諭

広島 三朗

私達日本パキスタン協会では、このところ毎年秋に、大学セミナー・ハウスで「シンポジウム・パキスタン」を開催している。落葉散る野猿峠に毎回七〇名から八〇名の人達が日本各地から集まって一泊二日を過ごす、私達にとっての一大イベントである。昨年の秋で第五回目になったが、これまで行われた内容は、パキスタンに関する政治、経済、文化などの多方面にわたり、特に好評だったものに「詩と音楽」、「言葉と文字」など、これまであまり日本人に知られていなかった分野のものがある。第五回目は、パキスタンの農牧業を中心とした「人とくらし」をテーマとして開催して、これも好評のうちに終わった。



パキスタン人留学生とともに。中央は広島三朗氏 (90.11.18 大学院セミナー館)



各界からの参加者たち(90.11.18野外ステージ)

私が初めてパキスタンへ出掛けたのは一七一年で、それ以来もう34回も足を運んでいるが、まだまだパキスタンに対する興味は尽きない。どうしてそんなにパキスタンへばかり出掛けるのですかと聞かれると、「びびくり箱みたいな国だから」と答えることにしている。本当にこの国は、まだまだ解らないことが多く、それを調査してゆくことは本当に楽しい。

パキスタンへ出掛けた最初のうちは、専門の登山や仏教遺跡などに興味があったが、そのうちにパキスタン人の生活そのものに興味に移っていった。それは山地で家畜とともに移動して生活する移牧や、さらには人々の日頃のムスリム(イスラーム教徒)としての生活そのものである。動かない山や遺跡より、いま現在動いているパキスタン人の生活である。実際に彼等の生活は、私達が本の上で知っていたムスリムの生活とは、ずい分と違うことに気がついた。私達のところへ伝わってくるムスリムの生活は、ムスリムのあるべき姿であって、本当の姿ではないのではない。真のムスリムの姿を知ること、これがいま最も興味のあることで、最近ムスリムの聖者崇拜をテーマにフィールド・ワークをしている。憶測や伝聞ではなく、彼等の真の生活に迫ることが国際交流の第一歩だろう。そしてこの蓄積したものを皆と分かち合いたい。本年秋の第六回目の野猿峠に、どれだけ多くの古い顔と、何人の新しい顔が集うかが楽しみである。

利用状況

● 9月128グループ、延五、〇九八八
 東京大学助教 柴田徳太郎
 芝浦工業大学職員夏季合宿研修会
 慶応義塾大学英語会イベントセク
 ション

- 早稲田大学講師 北野 弘久
- 東京理科大学狩野・高橋ゼミ*
- 明治大学教授 森川八洲男
- お茶の水女子大学教授 黒田 淑子
- 武蔵工業大学助教 新川 哲雄
- 早稲田大学理工学部英語会 堺 孝夫
- 中央大学助教 中川洋一郎
- 杏林大学助教 酒井 正文
- 立教大学助教* 中野 光
- 学習院大学教授 児玉 久雄
- 早稲田大学雄弁会 石井 正司
- 上智大学助教 土家 典生
- 早稲田大学絵画会 門脇 卓爾
- 学習院大学教授 佐藤 公彦
- 東京外国語大学助教 塚田 幹夫
- 東京理科大学助手 播 里枝
- 明治大学教授* 森反 章夫
- 東京経済大学助教 関田 寛雄
- 青山学院大学助教 西野 萬里
- 国際基督教大学教育哲学研究室
- 明治大学教授 増田 弘
- 中央大学生協同組合* 増田 弘
- 東洋英和女学院大学教授 佐藤 敏彦
- 芝浦工業大学助教 丸山 千秋
- 法政大学院助教 松尾 章一
- 中央大学教授 外間 寛
- 早稲田大学講師 深沢 実
- 駒沢大学教授 石井 脩二
- 芝浦工業大学助教 大塚 正久
- 芝浦工業大学建築学科八王子ゼミナ
ル

- 東京大学教授 高階 秀爾
- 法政大学教授 水野 節夫
- 筑波大学人間関係ワークショップ・
リユニオン
- 芝浦工業大学教授 石黒 哲郎
- 成城大学助教 小森 陽一
- 慶応義塾大学教授 神谷 不二
- 東京都立大学助教 川上美那子
- 青山学院大学教授 深沢 実
- 明星大学教授 小川 哲生
- 明治大学教授 森 久
- 慶応義塾大学助教 有末 賢
- 立教大学教授 敷田 禮二
- 青山学院大学講師 大森 秀子
- 青山学院大学助教 渡辺 節夫
- 東京大学弁論部 立教大学ドイッ文学科2年生合宿
- 立教大学講師 藤原 婦一
- 立教大学教授 茂木 虎雄
- 東京理科大学教授 富澤 稔
- 立教大学文学部集中合同講義A 並河 一道
- 東京学芸大学助教 荒木昭次郎
- 東海大学教授 木村 利人
- 早稲田大学教授 瀬戸岡 紘
- 駒沢大学教授 増田 茂樹
- 明治学院大学教授 武田 修一
- 文京女子短期大学教授 山本 武利
- 一橋大学教授 山田 經三
- 上智大学教授 吉田 裕
- 上智大学教授 鴨 武彦
- 東京外国語大学講師 岩崎 稔
- 東京理科大学教授 沖塩 一郎
- 高津看護専門学校 桜美林大学教授 山口 道登
- 放送大学教授 阿部 明子
- 都留文科大教授 和田 昭
- 東洋女子短期大学教授 小川 昭
- 産能大学講師 渡辺 慶和
- 玉川大学外国語学科卒業研究研修
旅行 行
- 文化服装学院新入教員研修会 布施 涛雄
- 桜美林大学講師 辰巳 正三
- 創価大学客員教授 星野 隆三
- 東京造形大学助教 山口 桂子
- 八千代国際大学講師 田中 宏
- 玉川大学教授 田中 宏

- 国士館大学助教 木原 英逸
- 昭和女子大学表千家茶道部
言語研究会
- 産能大学・東京電機大学夏のシンポ
ジウム
- 郡内研究会
- 第27回大学教員懇談会
- 生物学史研究会
- 早稲田無教会集会
- くにたち市民オーケストラ
- 洗濯機の会
- カンパウンド長老キリスト教会
- 府中バプテスタ教会
- 芦名教育臨床研究所
- 中央区青年学級
- からだごとば研究所
- 日米品質専門家会議
- 早稲田奉仕園
- 朝日カルチャーセンター
高橋聖書研究会
- 在日大韓基督教東京教会
- 日本基督教団荻窪教会
- 日本小児神経学会
- モラロジー研究所
- コニカ
- 国際商事法研究所
- ダス・ワックス
- 東芝プロセソソフトウエア*
- 多摩三菱ふそう自動車販売
- ウチダユニコム*
- 多摩市役所市史編さん室
- 田谷
- 酒井薬品
- 東芝生活文化研究所
- 東芝
- 東芝半導体システム技術センター
（個人利用）
- 電気通信大学助教 酒井 邦秀
- 昭和女子大学大学院生 樋口 静江
- 帝京大学講師 堀井 啓幸
- 10月82グループ、延三、七二一人
お茶の水女子大学教授 宮島 喬
- 東京学芸大学講師 投野由紀夫
- 東京都立大学教授 坂元 忠芳
- 中央大学教授* 徳永 英二
- 上智大学教授 松本 栄二

平成2年度 協力会員校事務連絡会

90年11月28日/10時半〜16時

本年度は学生課・教務課等の担当
者39名(34校)を迎えて行なわれた。
開館翌年の第1回以来、通算で21回
目の開催である。

開会では岡館長から今後の大学教
育のあり方と事務職員の役割に触れ
た挨拶があり、次いで小岩専務理事
ほか関係職員による概況説明、施設
案内が行なわれた。午後の協議会
は大妻女子大学学生部長・小林靖之
氏の司会のもとに質疑や意見・情報
の交換があった。

当日は荒天にもかかわらず、全員
が積極的に構内を一巡。右の協議会
でもそれぞれに当施設の一層の有効
活用に向けて努力してゆきたいとの
声を聞くことができた。短時間なが
らハウスへの理解と関心を深めてい
ただく機会となったことは幸せであ
った。

- 学習院大学教授 高橋 利宏
- 明治大学教授 小堀 巖
- 順天堂大学病院業務改善ゼミナ
ー 早稲田大学教授 田村 恭
- 東京学芸大学教授 森田 安一
- 東京工業高等専門学校日豪学生交流
会 東京大学助教 内田 慎一
- 成蹊大学 三沢 一
- 中央大学学生部学生相談室
- 早稲田大学教授 渡辺 仁史
- 一橋大学教授 石 弘光
- 東海大学教授 師岡 孝次
- 東京理科大学狩野・高橋ゼミ
- 学習院大学フランス会部
- 関東A地区国立学校事務電算化担当
職員研修会 岩上 真珠
- 明星大学教授 宿
- 東京純心女子短期大学英語力強化合
宿
- 中央大学教授 長谷川聰哲
- 明治学院大学教授 田村 剛
- 早稲田大学教授 川原 栄峰

(出席者)
東京(萩貝、荒木和歌子)・一橋(薄
田堯明、雨宮毅)・東京工業(沖松
昌朗)・東京学芸(下野文明)・東京
医科歯科(伊藤征司)・東京農工(下
村常夫)・東京外国語(岡部久雄)・
筑波(高橋泰)・千葉(細野浩一)・
埼玉(木谷紘二)・東京都立科学技
術(吉田広通、鈴木茂司)・早稲田(若
生誠治)・日本女子(田宮良子)・慶
応義塾(羽飼隆、水島小夜子)・明
治(工藤正治、須田和企、大森昭広)・
中央(大矢健治、小保方忠好、平岩
大典)・立教(栄井章博)・東京女子
(川名佐保子)・武蔵工業(大庭稔
尚)・成蹊(水野誠)・国際基督教(井
出次男)・武蔵(小倉守思)・大妻女
子(小林靖之)・学習院(今枝秀樹)・
芝浦工業(杉田朋子、川村和子)・
杏林(谷博之)・淑徳(菅谷厚子、
鈴木日出夫)・東京都立商科短大(梅
本利子)・文教大学女子短大部(須
原洋)

- 国際基督教大学グループ体験ゼミナ
ー 慶応義塾大学教授 渡部 康一
- 中央大学学生赤十字奉仕団
- 共立女子大学文芸学部学外ゼミナ
ー 学習院大学シエイクスピア・ドラマ
ソサイエティ
- 中央大学教授 池田 正孝
- 明治学院大学教授 宮野 彬
- 法政大学教授 五味 健吉
- 立教大学講師 秋野 晶二
- 日本大学助教 郷司 亮
- 大東文化大学河野・鈴木ゼミ合同合
宿
- 大月短期大学教授 村越 洋子
- 和洋女子大学助教 加藤 和夫
- ドロソフイラ・ミーティング
- 国際経済商学学生協会日本委員会
- 国際経済商学学生協会*
- 第17回国際学生ゼミナ
ー S・D・A・原宿ユース・センター
日本基督教長老教会東部中会

● 出版物案内 ●

巨大技術と人間

江沢洋・坂本百大・室田武編 朝倉書店 2,266円

いま、人間は、物理的な力においても自身のスケールをはるかに越えた、かつてなかった規模の計画をたて実行する能力をもつにいたっている。原子力はその一例である。宇宙旅行・海洋開発・人工知能といったさまざまな可能性も人間の前に立ち現われている。しかし、そのすべてが手ばなしで歓迎できるものではない。私たちがセミナーの呼びかけをしたのは、1986年4月のチェルノブイリ原子炉の事故から一年となっていないときであった。(本書のまえがきより)

ヘブライとヘレニズム

—— 合理性と非合理性をめぐる ——

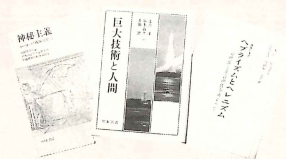
並木浩一・川島重成・絹川正吉・川田殖・荒井献著 新地書房 2,200円

日本人にとって、しばしば近代合理主義文明の代名詞のように見なされていた西洋文明というものの淵源に立ち返り、ヘブライズムとヘレニズムの両思潮の本質を、ギリシャ文学・哲学・数学、旧約聖書学、新約聖書学とグノーシス研究の各専門領域の方法を踏まえながら、能うかぎり学際的視野に立って、特に合理性と非合理性の問題に焦点をあてつつ解明する。(本書の序文より)

神秘主義 ヨーロッパ精神の底流

川端香男里編 若桑みどり・志村正雄・伊藤博明・松本夏樹著 せりか書房 2,000円

本書において、著者たちは西洋思想が管々として築いてきた強固な精神伝統としての神秘主義と取り組んだ。西洋の思想・文化・芸術を真に把握するためには、神秘主義の伝統を理解することがいかに必要であるかということが、従来日本ではほとんどかえりみられなかった。本書はこの面での研究の方向をさし示す最初の試みであると編者は自負している。(本書のあとがきより)



●業務課フロントにてお頒けしていますので、ご来館の折に是非お求め下さい。

- 国際交流基金日本研究部日本語課
ルソール合奏団
からだごとば研究所*
建築セミナー
日本セラミックス協会
日本機械学会スポンジ工学シンポジウム
京王ストア*
コニカ*
田谷*
日本分光工業*
工業所有権研究会
クオリティ・マネジメント
日本チエーンストア協会
オリンパス労働組合
テジーケー
横河ヒューレット・パッカー労働組合
雪印物産
日野協力会
日本信販
日本エル・シー・エー
大崎経営事務所
日立製作所情報システム工場

- 日本POP広告協会
カシオ計算機
日本ユニシス
伊藤商店
(個人利用)
帝京大学講師*
V研究会
東洋大学教授
東京都立科学技術大学客員教授
V・F・ポテラッシュ
11月(100グループ、延三、七六八人)
東京経済大学税理士受験会
東海大学教授
成蹊大学教授
成蹊大学アジア太平洋研究センター
東京都立大学教授
東京工業大学教授
東京純心女子短期大学卒業研修会
東京学芸大学教授
東京家政大学助教授
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
早稲田大学年網パーティー

- 芝浦工業大学教授
中央大学奇術研究会
東京都立大学助教授
日本女子大学教授
法政大学教授
千葉商科大学教授
一橋大学教授
千葉大学教授
東京都立大学生物学ゼミ1・2年
東京都立大学生物学ゼミ3・4年
東京都立大学教授
学習院大学教授
東京都立大学助教授
中央大学教授
千葉商科大学教授
東京都立大学助教授
東京大学助教授
立教大学教授*
学習院大学プロジェクト・ユースレス

- 国際基督教大学カウニングセンター
工学院大学教授
明治学院大学教授
国士館大学講師
福島大学教授
広島大学教授
関西学院大学ラグビークラブ
日本女子大学附属高等学校
東京神学大学全学修養会
名城大学建築学科志水研究室
東京YWCA専門学校国際ビジネス科
ロシア語劇団コンツェルト
第153回大学共同セミナー
日本国際学生技術研修協会
第17回国際学生セミナー報告書編集委員会
郡内研究会
現代資本主義研究会
現象学・解釈学研究会
各大学朝鮮文化研究会
桜ヶ丘教会

- 日本水産
安川電機製作所
日本アイ・ビー・エム
肥後労務管理事務所
テジーケー
ビューティーサロンタカハシ
タチエス
教育春秋社
日本アグファ・ゲバルト
ソニー・テクトロニクス
山村硝子
コニカ
(個人利用)
日本英語教育協会
東京都立科学技術大学客員教授
V研究会
F・D・フィッシュャー
東京都立科学技術大学客員教授
V・F・ポテラッシュ

編集後記

「ニュースをいつも楽しく拝見しています」と書き添えて下さった年賀状を頂戴して、機関紙の編集という一号一号の積み上げが、セミナー・ハウスの「総体」を表現するための大事な手段であることを、改めて思い直しています。今春には大学審議会の答申が出され、大学設置基準の「大綱化」が動き出そうとしています。そのことによつて一般教育の理念が消滅するのではなく、むしろ制度を超え、ダイレクトに大学教員に、大学観をめぐる思想性の問題をつきつけているように思われます。そうした営みなくして、セミナー・ハウスという「場」は恐らく意味を持たないことでしょう。岡館長の言われる「心の贅沢」(10頁)は、このような「場」ではじめて提供できるとの思いを深くしつつ、本号の編集を終えました。(能)

表紙の写真Ⅱ春を待つ雑木林と(真理の鐘) 撮影/中西 昇氏